

創刊特別寄稿

新生人間科学部心理学科に向けて

服部 卓



現職：群馬大学医学部附属病院精神科

1983年 文学部人文学科入学，1987年 同卒業

出身ゼミ：東條正城先生

人間科学部心理学科としての新たな出発おめでとうございます。先日、ホームカミングデーに参加させていただきましたが、緑に囲まれたキャンパスはそれほど変わっておらず、卒業して何年も経っていても、本当に自分のいた場所に帰って来れたような気持ちになりました。同期生にも会いましたが、もう何年も会っていなかったような友達でも、まるで、夏休み明けに顔を合わせた時のような気持ちになれるのは、この大学で学べた幸せなのだなと感じました。

在学中は、卒論を東條先生に、ゼミは重松先生にお世話になりました。お二人には、卒業後もいろいろとお世話になり、今の自分があるのは、本当に文字通りお二人のおかげなのです。そんなお二人のお姿が当日そこになかったことは、とても寂しい限りでした。でも、あの新しくなった研究室を見せていただいていると、まだ、お二人の心が、そこかしこにあるような感じを受けました。きっと、お二人も私たちの周りで、感心なさりながら見て歩いていらっしゃるのではないのでしょうか。

心理学というと人の心の中にある謎な部分を見つける学問だと思って入学した身にとって、専修大学の科学的な心理学はだいぶ面食らったものです。東條先生に教えていただいた心理学的な現象を生理学的な方法で探索して行く方法論、重松先生に教えていただいた心理現象の背景には脳の働きがあるんだということ、さらにお二人とともに山上先生や金城先生、藤岡先生、伊藤さんに教えられた科学的に考えるという方法は、現在の自分の仕事の中でとても役立っています。私は、現在、病院で患者さんの心理アセスメントを主な仕事としていますが、この世界に入った時に、周りの医学的な考えかたと、自分の中の心理学的な考え方がそれほど違和感がなかったのは、専修大学で学んだことが大きいのではないかと考えております。それは、一つ一つの知識というだけではなく、自分の考えるパターン、動く時の身体の動かし方として自分の中に染みこんでいるような気がします。

こうやって思い出していると、大学で学んでいた時の思い出は、エピソード記憶としてのそれの方が多いかもしれません。ある晩実験が遅くなってしまい、帰る時に、一緒にやっていた3人で東條先生の愛車で駅まで送っていただいたことがありました。ちょうど降り出した雪の中、あの急なキャンパスの前の坂で、どうみても先生の車が走っているのではなくて、滑っているのです。が、先生は大丈夫だよとおっしゃってとくにスピードを落とすわけでもなく、無事(?) 駅まで送っていただきました。そんなことが、つい昨日のように浮かんできます。専修大学心理学コースの、もう一つの魅力は、様々な自由さにあったのかもしれません。

今回、ホームカミングデーに参加させていただき、研究室の設備面でも、カリキュラム、教育面でも実に充実して、ここで学ぶ学生たちは幸せだなと思いました。学部、大学院からも多くの卒業生が社会に出て活躍をしていらっしゃるようで、一人の卒業生としても心強いばかりです。最後に、一足先に心

理学を使って生きている人間として、これから学び、社会に出て行く方へ、普段思っていることを書いて、拙文を終わらせていただこうと思います。高度な心理学を学んでいると、人間というものを心理学だけで説明できるのではと言う気持ちになります。さらに、自分の専門分野ばかりに目が行ってしまい、それ以外の心理学の分野はあまり見なくなってしまうがちです。しかし、実際に仕事として心理学を媒体に人と接していると、人というものは心理学の枠に入りきるようなものでもないことが見えてきます（だからこそ、心理学は研究され続けて行くのでしょうか）。さらに、臨床に携わって行く中でも、その方法や考え方の背景に、いわゆる基礎的な心理学、学習、社会、認知などがあって、そういうことを知っていることが、より自分のやろうとしていることを深めてくれるように思います。心理学を学ぶ上で、また、心理学的な仕事に就く上で、大学で教わる様々なことが決して無駄になることはありません。新しい心理学科のカリキュラムの広さは、そのようなどこかで役立つこと、自分の助けになることと出会うチャンスをたくさん与えてくれることとなると思います。そして、専修大学の自由さ、何ごとにもとらわれない校風というのは、自分の頭を柔らかくしてくれる、大きな力となるのではないのでしょうか。これからのみなさまのご活躍を心からお祈りしております。また、その歴史の一端に自分もあつたことを誇りとしてやっていきたいと思っております。また、訪れてみたいと思います、あの4号館を。